

山室眞二版画展

—『うー讚』川上日車の川柳—

主幹
田中新

4月3日の本社句会の日に穂山常男事務局長から「山室眞二版画展——『うー讚』川上日車の川柳——」の案内状が届いていると知らされました。発信人は山室眞二さんご本人からで、案内状には、

「川上日車(1887〜1959年)さんは、染織家、志村ふくみ先生の伯父に当たる方で、かつての新興川柳運動の代表的作家です。短い言葉で芸術性を求めた難解な句ですが、かえって読む人の想像を豊かにし、半世紀以上も前の句とは思えない、今なお新鮮で興味の尽きない句です。このたび、志村ふくみ先生が選句された川柳を山室眞二さんがじゃがいも版画に仕立てました。春のひととき、どうぞ高覧賜りたくご案内申し上げます。

2022年3月吉日 アトリエシムラ」

とあり、会期は2022年4月8日〜5月10日、12時〜

18時、定休日は水・木曜日、祝日営業、会場はアトリエシムラ京都本店(京都市下京区河原町通四条下る市之町251-2 寿ビル2F・電話075-585-5953)とのことでした。

川上日車のプロフィールには、本名卯治郎(卯次郎とも書く)。1887(明治20)年9月12日、大阪市船場(西道頓堀)の砂糖問屋「阿波屋」の三男として生まれる。志村ふくみ(人間国宝)の母、小野豊とよの兄。生涯放浪を続けた新興川柳運動の代表的な作家。明治39年に小島六厘坊が創刊した関西で最初の川柳誌「葉柳」の同人。「葉柳」には西田當百、木村半文銭、麻生路郎など錚々たるメンバーが集った。著書に「日車句集」(1933年川柳叢書刊行会と1956年番傘川柳文庫)がある。1959(昭和34)年、妹、豊の元にて72歳で没と、書いてありました。

4月3日の本社句会席上で、出席者皆さんにもお知らせしました。

4月10日に、稚山常男事務局長とともに「アトリエシムラ」を訪れたところ、同じ時間帯に志村ふくみさんの娘さんお二人も来られて、いろいろとお話することが出来ました。

自己紹介の折に、お二人の従兄弟さんに当たる植村貞澄さんと友人であることをお伝えしました。

そして、一番先に川上日車は「にっしゃ」であるのか「ひぐるま」であるのかをお尋ねしたところ、身内のものは「にっしゃ」と呼んでいたとかつて植村貞澄さんにお尋ねした時と同じ答が返ってきました。

川上日車と旧制市岡中学校の一期生であった小島六厘坊、小出檜重画伯の話になり、六厘坊は新聞「日本」の正岡子規選の俳壇の投句から井上劍花坊選の柳壇に投句するようになり、好成绩を得たことから、日車をはじめ同級生を誘うことになったことや、2008(平成20)年に、400年の長きにわたって大阪の賑わいを見守ってきた大阪道頓堀の「戎橋」が新しく架け替えられた時に、橋の南北両端に設置された銘板に、「戎橋白粉紙を散らす恋」

に小出檜重画伯の谷崎潤一郎「蓼食う虫」の挿絵が刻まれているなどを話しました。

ラッキーなことに、午後2時に版画の山室眞二さんが鎌倉から来られるとのことで、お会いさせてもらうことになりました。

この版画展に展示してもらえたらと思い、川上日車が「番傘」(昭和30年8月号から昭和32年7月号)に書いている「大阪川柳小史」を再掲した「番傘」の2021年12月号から2022年4月号までを届けておいたので「番傘」を見てもらいながら話が弾みました。

田辺聖子さんの「道頓堀の雨に別れて以来なり——岸本水府とその時代」のことや、堂垣園江さんが大阪の大正ロマンを書くのに、小出檜重画伯に焦点をあてて執筆中で、交友関係を調べていくうちに小島六厘坊や川上日車等の川柳作家との交流が面白いと言っていたことや、川上日車の美しい容貌にも触れられていたこと、更には、川上日車と岸本水府との交流もよく調べておられることも話しました。アトリエの壁には山室眞二さんの版画が展示され、真ん中の机には二冊の「日車句集」が展示されていました。

初編・続編に分冊された「撰・志村ふくみ」う讚——川

上日車の川柳——』の初編のはじめに、志村ふくみさんが「伯父のこと」を書いておられます。

「そんな余裕もないのに何となくおしゃれな人でした。中学時代から、信時潔（のぶとききよよし）（作曲家）さん、小出檐重さんと友達でよく遊びにいらしていたそうです。そのころ生まれた私に泥絵の屏風を檐重さんがかいてくださいました。私が十九才の時書いた「美沙姫物語」をはじめてみせたのも伯父と兄でした。『勉強しいや』とはげましてくれました。世の中を斜にみて、どこか寂しい人でした。

私たちは卯治郎伯父のことを親しく『うーさん』とよんでいました。よく私に文学や芸術のはなしをしてくれました。

柳宗悦先生（やなぎむねよし）（1889—1961 美術評論家、宗教哲学者、民芸運動の提唱者、文化功労者）お伴で朝鮮にわたり、いろいろ深い見学をしたようです。李朝の小さな水滴をおみやげにくれました。五角形で儂い撫子の花が描かれています。それはく、美しいものでした。母や伯父や兄に、私は最初の芽を開いてもらったような気がします。」

おわりになりましたが、志村ふくみ選の川上日車の作品を紹介します。

（初編より）

酒すこし飲めば淋しくなるものか

果太鼓いまや鰻を裂かむとす

飯ほどわたしを理性にしたものはない

嘘はつけぬ薪ざっぱから泡を沸（ふ）き

土瓶から茶が出る嘘もすこし出る

（続編より）

土ほれば土 土ほれば土と水

と書（い）いてあつた脅かしやがる

